

江口栄子

秋

江口 渙とともに



終

江口

渙とともに

江口栄子

光和堂

江口栄子（えぐちえいこ）

栃木県那須郡烏山町中央1-15-5

柊（ひいらぎ）

江口渙とともに

1982年9月25日 印刷

1982年10月20日 発行

江口栄子 著

草鹿直太郎 発行

第二整版印刷

定価1500円 千250

東京都豊島区西巣鴨1-15-4

発行所（株）光 和 堂

振替東京 1-68414

検印廃止 818-4268

電話東京 918-4111

© EIKO EGUTI 1982

ISBN4-87538-057-7

終／目次

渙をめぐる文人たち

江南文三とその妹 9

古田大次郎と江口渙 16

作家の恋人 20

芥川龍之介 25

漱石山房 32

岡本かの子の手紙 34

与謝野晶子の手紙 39

額田王の歌など 45

鷗外、秋声のこと 48

宇野浩二と江口渙 51

蔵原さんと江口渙 60

荒正人さん 63

巴金さんのことなど 70

渙のプロフィール

ニコライ・シチセレンコさんのこと 77

日本へ来たディートリッヒ 80

「作品」に描かれた渙 82

渙の好きな女性 84

栃木県における文化活動 91

動物好き 96

童 話 102

ポスター貼り 107

お金のこと 109

夫を語る 114

講演旅行 117

ラジオ、テレビに出たこと 120

映画「小林多喜二」 122

聞き書あれこれ 124

渙と私

渙にはじめて会った日 131

烏山へ来る 136

烏山へ来てから 156

父の死 169

弟の交通事故 177

療養日記

最初の発作から長期入院まで
189

入院生活
223

烏山へ帰る
251

退院後の渙
269

柊
285

あとがき
295

装幀・岩崎幸子

柁

—江口 渙とともに—

渙をめぐる文人たち

江南文三とその妹

「わが文学半生記」の『羅生門』の出版記念会と佐藤春夫」の章に、江南文三について渙は次のように書いている。

「江南文三を私はずっと前に、金沢の四高で知っていた。私が一九〇五年に四高を退学して、また五高に入りなおしたりしたので、三年おくれて大学にきて見ると、江南はまだ卒業しないでぶらぶらしていた。そして（略）石川啄木がやめたあとをうけて、『スバル』の編集をして学資をかせいでいた。（略）江南文三は四高以来新詩社の同人で与謝野鉄幹、与謝野晶子夫妻に愛され、『明星』にも『スバル』にも詩や歌をのせていた。『スバル』には自叙伝体のきわめてシニカルな小説を連さいしていた。詩も歌も当時の明星派の象徴主義の性格を持ったものであった

が、彼独自のきわめてシニカルな人生批判がよく出ている点で特徴のあるものだった。文壇の一部からは鬼才文三ぶんざとまでいわれていた。おいしいことに大学を出ると生活のために田舎の中学の先生になり、文学をやめて長年田舎まわりをしたあげく、最後は東京一中（府立一中、筆者註）の先生になった。小田切秀雄なども江南に英語をおそわったということだが、こんどの戦争の直後、一九四六年の二月に栄養失調で死んだ。年は私より一つ下だった

室生犀星は、一九〇九年に上京し、金沢で面識のあった江南文三を訪ねた。そのときの犀星の文章を引用しよう。

「池の端に当時『スバル』の名編輯者江南文三を訪ね、『スバル』の校正でもさせてくれるように頼んでみたが、校正は江南一人がやっていたのでそれを分けるということが出来ない、皮肉と非情の彼は見たところ到底私なぞの太刀打ちできる人物ではなく、新進の時めく『スバル』の有力者だったのだ。小っぴどくやつつけられていつも追い払われた。鵜外邸にも折々は行くらしい切れのよい江南文三は、どう見てもすごい当時の文学青年の勢いにあふれていた。」

年譜によると犀星は一九一二年に詩「青き魚を釣る人」と、詩「かもめ」を江南の好意によって「スバル」に発表している。

渙の文壇的処女作「かかり船」も江南文三によって一九一二年に「スバル」に発表され翌一三年にはやはり「スバル」に「小刑吏」を発表している。

芥川龍之介の「文芸的な、余りに文芸的な」のなかの「半ば忘れられた作家たち」のなかに次のような文章がある。

「僕は僕の前輩や知人に二、三の好短篇を書きながら、しかもいつか忘れられた何人かの人々を数えてゐる。彼等は今日の作家たちよりも或は力を欠いてゐたのかも知れない。けれども偶然と云ふものはやはりそこにもあった訳である。（略）『生まるる時の早かりしか、或は又遅かりしか』は南蛮の詩人の歎ばかりではない。僕は福永挽歌、青木健作、江南文三等の諸氏にもかう云ふ歎を感じてゐる。」

学生時代の渙にとって、江南文三はもともと親しい友人であつた。一九一三年に渙を高村光太郎のアトリエに連れて行つたのは江南夫妻だつたし、佐藤春夫にはじめて会つたのも江南の部屋であつた。江南の父は朝鮮の鉦山で失敗したらしく、当時の江南家は窮迫の状態であつたらしい。文三の兄は美校出の洋画家、妹は少女時代からピアノを弾いており、東京府立高女から師範の二部へ行き、小学校の音楽の教師をしていた。このように、江南家の人たちは芸術家的素質を持っていた上に、そろつて美男美女であつた。渙は「教師になると生活が安定してしまうので、作家としての才能を伸ばせなくなる」といつていたが、江南文三の場合は女性に特殊の魅力があつたらしく、次々に愛人があらわれ、そのことが才能を開花させなかつた一つの原因ではないか。つまり、多くの女性に愛されたことは、江南にとってマイナスの作用をしたことになつたと私には

思えるのである。一例をあげれば、四国で中学の教師をしていた頃、女高師出のひとつ、小学校教師、それに土地の芸妓の三人が鉢合せして、土地の新聞に書きたてられ、江南は職を辞し、四国の芸妓も上京した。この事件のとき渙は帰京した江南のために友人として助力している。なお、渙が一九一八年に「文章世界」に発表した「二つの虚偽」のモデルは江南の最初の妻大江秋子である。

一九四八年の五月に、はじめて渙に会ったときから、渙の晩年に至るまで、「江南の妹」について私は何度渙から聞かされたことだろう。それは渙の結果的大失恋の話なのだが、一九三四年に文化集団社から刊行された長篇「火山の下に」の始めの方に、私が渙から聞いたこととほぼ同じことが書いてあるので、すこし長くなるが渙自身の文章を引用する。

「大学を卒業すると、早速田舎の中学教師の口を見附けた多枝子の兄の東（江南―筆者）が、いよいよ赴任する事になったので、東とは高等学校以来の友人である要助（渙―筆者）もその出発を見送る可く両国駅へ出懸けて行った。（略）半歳会わない間に多枝子はもうすっかり女らしくなつてゐた。（略）するとその次の年の四月始めの或る日だった。春休みを利用して東京へ遊びに来た東夫婦に、久しぶりに下宿を訪ねられた要助は、二人の口から突然意外な申出を聞かされた。それは要助がもし嫌でなかったら是非妹の多枝子と結婚してくれないか、多枝子の方は以前から結婚についての凡てを自分達に任せてゐるから多分大丈夫承諾するだらうといふのだ。そ

れは要助にとって何といふ思ひがけない歎びであり、異状な驚きであつた事か。彼は文字通り即座に無条件に承諾した。(略)然し要助の幸福はさう長くは続かなかつた。何故なら田舎の中学へ帰る前に多枝子との結婚についてのもっと具体的な話をもたらし、必ずもう一度要助を訪ねる筈だつた東夫婦は、訪ねて来るどころか、何の挨拶もなしに、何時か東京を去つて終つた。然もその事についてそれっきり唯の一言も云つて寄越さないばかりか、要助の方からそれとなく円曲な問い合せをしても、矢張り少しの返事さへもくれなかつたからだ。(略)毎日毎日深められて行く不安のために、眼の前に迫っている卒業試験の準備なども、全くどうにも手につかなかつた。が、いよいよ迫つて来る卒業試験と、未決定のまま残された結婚問題との、二つの不安の渦にまかれて彼が殆んど居ても立つてもゐられないやうな気分に駆られ始めた六月初旬の或る日だつた。思ひがけなくも東夫婦がひょっこり下宿に彼を訪ねた。(略)東夫婦の云ふところはかうだつた。(略)要助と是非結婚すべく勧めると、それまで俯向き勝ちに歩いてゐた多枝子は、とうとう芝生の上へ踞つて如何にも深い理由があるらしく、そのまましく泣き始めた。そして彼女にはもう結婚を約した愛人のある事を、始めてはっきりと告げなければならぬと云ふのは、矢張り同じ小学校の同僚で、然もあまりに狂熱的にぶつかつて来られたために、若し飽くまで拒絶したら自殺しやしまひかと云ふ予感にさへも脅かされて、ついとうとうそんな結果になつたのだといふことまで打ち明けたさうだ。

『ずっと先から要助さんとの結婚を、一人でいろいろ考へてゐたんですけど、私なんかの方と到底結婚する資格がないと思ひ込んでゐたものですから、すっかり諦めすぎてついこんな事になつて終つて』

彼女は幾度もこんな言葉を繰り返して、何時までも声を殺して泣き続けたといふことだった。

『多枝子だって、さうならさうともっと早く云つてくれたらこんなことにならなかつたのに變に謙遜するのが悪いんだよ』

最後に東も氣の毒さうにこんな言葉をつけたりした。

要助はあまりに意想外な恋愛の結果に対して、一人ひそかに放浪の旅へ出やうかしらと考へたりして無残に傷ついた心を出来るだけ慰めやうとした。が、流石にそのまま凡てを諦める事が出来なかつた。(略)その結果、彼はとうとう文科大学の卒業試験を捨てて終つた。」

この失恋の傷手は強烈なもので、渙は「二年間何にも出来なかつた」といつていた。もちろん大学へは出席しなかつた。そしてこの傷心から起ち上るために、宇野浩二いうところのけんりんたる美文調の恋愛小説を書いたのである。

「火山の下に」の初めの三分の一は、一九二一年の婦人公論に「避暑地の恋」という題で発表した。一九二九年から三〇年にかけて、福岡日々新聞に「避暑地の恋」と同じ主題にその後の思想の経験も加えて「火山の下に」という題で連載した。福岡日々新聞に連載した「火山の下に」を